日蓮遺文にみる賢王と愚王―印度・西域を中心に―

高森大乗

一、はじめに

日蓮聖人は、『立正安国論』の上奏や度々の国家諫暁という行為にも示される通り、王法と仏法の関係に対する関心を強くもっていた人物として知られる。仏法の正邪によって王法の盛衰があることは、『立正安国論』（二一八～二一九頁・一四六六～一四六七頁）をはじめ、『祈祷鈔』（六八一頁）、『顕仏未来記』（七四一頁）、『曽谷入道殿御書』（八三八頁）、『神国王御書』（八八五頁）、『清澄寺大衆中』（一一三三頁）、『四信五品抄』（一二九九頁）、『四条金吾殿御返事』（一三〇四頁）、『下山御消息』（一三二八頁）など諸遺文にみえる。では、日蓮聖人は、いかなる王を賢王とし、いかなる王を愚王とみなしていたのか。

日蓮聖人が、国主・国王の在り方を論じる場合、仏典や中国・日本の史書等に基づいて過去の先例を引き、現在（鎌倉時代の当時）に照らして、その是非を述べることが多い。中国・三韓・日本の史実に基づいた日蓮遺文中の記述については、すでに先行研究[1]があるので、本稿では、印度・西域の王朝史・王統史上の国王に関する遺文中の記述を整理し、日蓮聖人の国主観の一端を探ってみたい。

仏典には、仏菩薩の前生譚[2]や、王の過去世・未来世の物語に至るまで、数多くの国主が登場するが、本稿では、このうち印度史上実在したことが認められる国王・帝主を取り上げる。遺文中には、前六～五世紀頃の十六大国の時代から七世紀のヴァルダナ王朝期に至るまでの六つの王朝に亘って、代表的な一七（または一六）名の国王が登場する。

本稿では、主に望月信亨編『望月仏教大辞典』（世界聖典刊行会）、立正大学日蓮教学研究所編『日蓮聖人遺文辞典』歴史篇（身延山久遠寺）、中村元編『広説仏教語大辞典』（東京書籍）などに基づき諸王の事蹟を確認し、また日蓮遺文中の記述を概観して、それぞれの王に対する日蓮聖人の理解と認識について検討を試みたい。

二、十六王国併立時代の王

十六王国（十六大国）とは、前六世紀頃から前五世紀頃にかけて古代印度に形成され、相互に争っていた諸国の総称である。十六大国の国名には諸説あるが、『長阿含経』（『正蔵』一巻三四頁b）によれば、①鴦伽（Anga、アンガ）、②摩竭陀（Magadha、マガダ）、③迦●（Kasi、カーシー）、④居薩羅（Kosala、コーサラ）、⑤抜祇（Vrjj、ヴァッジ）、⑥末羅（Malla、マッラ）、⑦支提（Cedi、チェティ）、⑧抜沙（Vatsa、ヴァッサ）、⑨居楼（Kuru、クル）、⑩般闍羅（Panchala、パンチャーラ）、⑪阿湿波（Asvaka、アッサカ）、⑫阿般提（Avanti、アヴァンティ）、⑬婆蹉（Matsya、マツヤ）、⑭蘇羅婆（Surasena、シューラセーナ）、⑮乾陀羅（Gandhara、ガンダーラ）、⑯剣●沙（Kamboja、カンボージャ）の一六国がみえる。

いま、十六王国併立時代の諸王のうち、日蓮遺文中における釈尊在世当時の国王としては、浄飯王・波斯匿王・頻婆娑羅王・優陀延王・阿耆達王・波瑠璃王・阿闍世王がみえる。各王の事蹟を整理し、遺文中の説示をもとに日蓮聖人の知識と認識を確認してみたい。

（一）浄飯王

梵名Suddhodana（シュッドーダナ）。首圖馱那などと音写し、漢名を白飯・浄飯・真浄などと訳す。中印度のカピラヴァストゥ（Kapilavastu、迦毘羅城）の城主であり、シンハハヌス（Simhahanus、師子頬王）の長子、釈尊の父である。王の兄弟には所説あるが、『仏本行集経』（『正蔵』三巻六七五頁c～）等には、白飯王・斛飯王・甘露飯王の三人の弟と甘露味という一人の妹がいたと伝えられる。隣国のコーリヤ（Koliya、拘利）族のスプラブッダ（Suprabuddha、善覚）の二女マーヤ（Maya、摩耶）を妃に迎え、父王の後を継いで王となる。摩耶夫人との間に生れたのがシッダールタ（Siddhartha、悉達多太子）で、後に仏陀となる。摩耶は産後七日に歿したので、悉達多太子は第二夫人（一説に摩耶の妹）のマハープラジャパティ（Mahaprajapati、摩訶波舎波提）に養育された。

浄飯王は太子の出家を憂い、留めようとしたが阻止できず、太子の出家した後も帰城を勧めたが、その志の堅いことを知るに及んで五人の同行者（五比丘）を遣わした。太子は成道し仏陀となり、後には王自身も仏道に帰依した。

日蓮遺文では、『開目抄』（五五〇頁）、『兄弟鈔』（九二三頁）、『法蓮鈔』（九三五頁）、『千日尼御前御返事』（一五三八頁）、『四条金吾殿御返事』（一六六六頁）などに釈尊の父として、『法華題目鈔』（三九八頁）、『法蓮鈔』（九三五頁）に提婆達多の叔父、『開目抄』（五六二頁）には羅●羅の祖父としてその名がみえる。また、『祈祷鈔』（六七四頁）では師子頬王の血縁を「転輪聖王の御一門」と讃える。

『兄弟鈔』（九二七～九二八頁）では、

釈迦如来は太子にてをはせし時、父の浄飯王、太子ををしみたてまつりて出家をゆるし給わず。四門に二千人のつわものをすへてまほらせ給ヒしかども、終にをやの御心をたがへて家をいでさせ給ヒき。一切はをやに随ッべきにてこそ候へども、仏になる道は随ハぬが孝養の本にて候か。されば心地観経には、孝養の本をとかせ給ッには、棄恩入無為真実報恩者等云云。

と、父母の心に随わずとも父母の孝養・報恩となった例として釈尊の出家をあげ、「棄恩入無為真実報恩者」（典拠は『心地観経』とするが未詳）の最たるものとして引く。『報恩抄』（一一九二頁）、『兵衛志殿御返事』（一四〇五頁）においても、同様の義が説かれる。

また、『撰時抄』（一〇〇五・一〇二〇頁）では、釈尊が父に『観仏三昧経』を、母に『摩訶摩耶経』を説いて、父母に孝養の道を尽くしたことが述べられ、『忘持経事』（一一五一頁）にも釈尊が父母を化導したことが説かれる。

なお、『兵衛志殿御返事』（一五〇六頁）では、浄飯王の前生譚として摩訶羅王の故事が引かれる。

（二）波斯匿王

梵名Prasenajit（プラセーナジット）。波斯匿・鉢羅犀那折多・卑先匿などと音写し、漢名は勝軍・勝光・和悦・明光・月光（これに対して釈尊は日光と呼ばれた）などと訳される。在位は、前六世紀頃または前五世紀頃。

釈尊在世中の中印度コーサラ国（Kosala、●薩羅国）舎衛城の王。父は同城主ブラフマダッタ（Brahmadatta）あるいは前王マハーコーサラ（Maha-kosala）といわれ、釈尊降誕

の日に生まれ、釈尊成道の年に即位、コーサラ国とカシ国（Kasi、迦●国）を領有し大いに威を奮った。深く仏教に帰依し、八〇歳で歿したと伝えられる。

王の即位および釈迦族との婚姻については、『増一阿含経』に詳しい。波斯匿王は、釈尊が成道してまもない頃に即位し、釈迦族より后を娶らんとした。釈迦族は波斯匿王が暴悪無信のため、妃を差し出さなければいずれ侵略に及ぶことを危惧した。また、一族の血筋を種性高貴であると自負する釈迦族にとって、下賤の王との婚姻は忌むべきことであった。そこで、釈子大名のマハーナマ（Mahanama、摩訶摩男・摩訶那摩・摩訶男）は、一計を案じ、自分と婢女との間に生まれた容姿端麗な一女マッリカー（Mallika、末利）を釈種の女と偽って嫁がせた。王はこれを第一夫人として迎え、一男ヴィドゥーダバ（Vidudabha、毘瑠璃・毘流勒・波瑠璃・破瑠璃・毘盧釈迦）をもうける。

『中阿含経』によれば、王は、先に帰仏していた末利夫人の導きで優婆塞となり、仏教を外護したと伝えられる。また、王のもうひとりの太子ジェータ（Jeta、祇陀・祇多）は、自身が所有する林園をスダッタ（Sudatta、須達多）長者に譲って祇樹給孤独園（祇園精舎）を建てたことで知られる。

当時の中印度の二大王国は波斯匿王のコーサラ国とビンビサーラ王（Bimbisara、頻婆娑羅王）のマガダ国（Magadha、摩竭陀国）であったが、波斯匿王は、妹（一説に姉）のコーサラ・デーヴィー（Kosaladevi）をマガダ国の頻婆娑羅王に嫁がして、その嫁資としてカシ国を提供したといわれる。『雑阿含経』によれば、晩年、カシ国の領有を巡って、頻婆娑羅王の子アジャータシャトル（Ajatasatru、阿闍世）と対立し、一時舎衛城より敗走するが、後に阿闍世を破り、これを捕虜としてマガダ国に還した。更に『有部毘奈耶雑事』によれば、その三年後、波瑠璃太子の謀反により王位を奪われ、阿闍世に救いを求めてマガダ国に逃げるも、果たさずに命終したといわれる。ちなみに、『有部毘奈耶雑事』は、波斯匿王歿後ほどなくして、波瑠璃王が釈迦族のカピラヴァストゥ（Kapilavastu、迦毘羅衛城）を攻略したことを伝える。

なお、波瑠璃太子の母の名前は仏典により一致せず、『有部毘奈耶雑事』では、第二夫人シリーマーラー（Srimala、勝鬘）を母とする。マッリカー（末利）とシリーマーラー（勝鬘）を同一人物とする説もあるが、『勝鬘経』によれば、勝鬘夫人は波斯匿王と末利夫人の娘で、アヨーディヤー国（Ayodhya、阿踰闍）友称王の妃になった人物とされるなど、一定ではない。

日蓮遺文では、『守護国家論』（一一四頁）、『立正安国論』（二二一頁）、『立正安国論（広本）』（一四七〇頁）などにおいて、『仁王般若波羅蜜多経』受持品（『正蔵』八巻八三二頁b）の引文中に、対告としてその名がみえる程度で、日蓮聖人の認識を知りうるには足らない。しかしながら、十六大国の国王を対告に「仁王」による護国の因縁を説いた『仁王経』では、婆斯匿王は、仏法外護の王として位置づけられている。

『開目抄』（五六四～五六五頁）では、

仏すら九横の大難にあひ給ふ。所謂提婆が大石をとばせし、阿闍世王の酔象を放し、阿耆多王の馬麦、婆羅門城のこんづ（槃）、せんしや（旃遮）婆羅門女が鉢を腹にふせし、何ニ況ヤ所化の弟子の数難申ス計リなし。無量の釈子は波瑠璃王に殺サれ、千万の眷属ハ酔象にふまれ、華色比丘尼ハ提多にがいせられ、迦慮提尊者は馬糞にうづまれ、目●尊者は竹杖にがいせらる。其上ハ六師同心して阿闍世・婆斯匿王等に讒奏して云々、

瞿曇、閻浮第一の大悪人なり（以下略）

と、九横の大難の説示がなされた後に、六師外道が波斯匿王に対して釈尊を讒言したことが追記されるが、王の信仰は揺るがなかった。ここでの波斯匿王は、釈尊や仏教教団の外護者として捉えられたものと思われる。

（三）頻婆娑羅王

梵名は、Bimbisara（ビンビサーラ）。頻婆娑羅・瓶沙などと音写され、漢名は影勝・影堅・模実・諦実などと訳す。

釈尊在世の中印度マガダ国の王。生歿・在位は、前六世紀頃または前五世紀頃とされるが未詳。一説にはシャイシュナーガ（Saisunaga）朝第五世とする説もある。大蓮華王の太子として釈尊と同日に生まれ、その威光が光影殊勝なるをもって「影勝太子」とも命名される（『有部毘奈耶出家事』）。コーサラ国より波斯匿王の妹コーサラデーヴィー（Kosaladevi）、ヴィデーハ国（videha、毘提訶国）よりヴィデーヒ（Videhi、韋提希）を迎えて后とし、韋提希はアジャータシャトル（Ajatasatru、阿闍世）を生んだ。なお、韋提希は、一説にプラセーナジット王（Prasenajit、波斯匿王）の妹ともいわれる（『雑阿含経』『出曜経』）。

釈尊より五歳年少の頻婆娑羅は、一五歳で王位につき、三一歳の時、釈尊に帰依したと伝えられる（『巴梨文大史』）。王は、釈尊が出家してマガダ国に立ち寄った時に、その深志にうたれ、成道の暁には最初に化導せんことを願じたともいわれ（『修行本起経』）、また国を分けて統治することを勧めて出家をとどめさせようとしたともいわれる（『方広大荘厳経』）。王は、釈尊成道の後、四諦の法を説くのを聞いて優婆塞となり（『中阿含経』『頻●娑邏王仰仏経』）、竹林精舎を寄進するなどして釈尊とその教団を外護した。王は毎日三時に臣属を率いて仏所に詣り、釈尊を礼観したが、晩年は身衰えて仏所に至らざるに及んで、仏の髪の毛や爪を求め、のちに宮殿内の塔寺に安置して礼拝したといわれる（『撰集百縁経』）。

釈尊入滅の七年前、王は息子の阿闍世に怨まれ、デーバダッタ（Devadatta、提婆達多）と共謀して幽閉され権力を奪われ、獄中にて命終したと言う（『有部毘奈耶破僧事』）。

頻婆娑羅が阿闍世に怨みを持たれたのは、老齢にして子のなかった王が、占相師に占わせたところ、王舎城五山の一つヴィプラ（毘富羅）山に住するひとりの仙人が死後に王の太子となって托生することを告げられ、仙人の死を待ちきれなかった王が、存命中にもかかわらずこの仙人を殺害したところ、韋提希が阿闍世を懐妊・出産した故事による。王は、再び占相師に阿闍世のことを占わせたところ、いずれ父王を害するであろうことを予告され、王はこれを恐れて阿闍世を高楼より地に捨てたが、王子はただ一指を折るにとどまった。このように未生以前に既に怨を結んでいたことをもって、阿闍世を「未生怨太子」と呼ぶという（『大般涅槃経』）。

王は獄中より遙かに耆舎崛山を望んで仏影を拝していたが、阿闍世はそれを知って牢獄の窓を閉塞じ、かつ王の足下を刺して立てなくさせた。釈尊は、幽閉された頻婆娑羅のもとに弟子の目連を遣わして慰問せしめた。

このように父母を呵んだ阿闍世王ではあったが、ある日、阿闍世が我が子の疾患を憂える姿を見た母の韋提希が、かつて同様に幼き阿闍世の疾患を憂えたという父王の慈愛を語

ったところ、阿闍世の逆心はたちまちに止んだという。阿闍世は父王を赦そうとして、家臣を父王のもとに向かわせたが、父王は苦刑が加えられるものと錯誤し、迷悶して絶命したという。この「王舎城の悲劇」は、釈尊の晩年に起こったものとして知られている。

頻婆娑羅王の故事は、日蓮遺文では、『祈祷鈔』（六七五頁）、『法華取要抄』（八一二頁）、『法蓮鈔』（九三五～九三六頁）、『妙一尼御前御返事』（九九九～一〇〇〇頁）、『上野殿御返事』（一三〇六頁）、『日女御前御返事』（一五一六頁）、『兵衛志殿御返事』（一六〇五頁）などにみえる。

頻婆娑羅王が釈尊ならびにその教団を外護した史実について、しばしば日蓮聖人は、王が臣属を率いて仏所を毎日訪れた故事に触れ、「日日に仏並ヒに御弟子を供養し奉リき」（六七五頁）、「日日に五百輛の車を数年が間一度もかかさずおくりて、仏並ニ御弟子等を供養」（九三六頁）、「教主釈尊に日々日々に五百輛の車ををくり」（一六〇五頁）などと説いている。

また、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）、『日眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）では、四条頼基や日眼女の釈迦仏造立の志を讃え、優填王の仏像造立の故事（後述）と並んで、頻婆娑羅王の造像の故事を示すが、頻婆娑羅王の造像については、恐らくは老齢のため仏所に詣でることが叶わなくなった王が、仏の髪爪を宮殿に奉安し礼拝した故事に由来するものと思われる。

日蓮聖人の頻婆娑羅王に対する認識で、特筆すべき点は、やはり何よりも太子の阿闍世との確執である。『上野殿御返事』（一三〇六頁）では、

びんばさら王と申せし王は賢王なる上、仏の御だんなの中に閻浮第一也。しかもこの王は摩竭提国の主也。仏は又此国にして法華経をとかんとおぼししに、王と仏と一同なれば、一定法華経とかれなんとみへて候しに、提婆達多と申せし人、いかんがして此事をやぶらんとおもひしに、すべてたよりなかりしかば、とかうはかりしほどに、頻婆沙羅王の太子阿闍世王を、としごろとかくかたらひて、やうやく心をとり、をやと子とのなかを申シたがへて、阿闍世王をすかし、父の頻婆沙羅王をころさせ、阿闍世王と心を一にし、提婆と阿闍世王と一味となりしかば、五天竺の外道悪人雲かすみのごとくあつまり、国をたび（給）、たからをほどこし、心をやわらげ、すかししかば、一国の王すでに仏の大怨敵となる。

と、釈尊の有力な外護者のひとりであった頻婆娑羅王が、提婆達多にそそのかされた太子の阿闍世によって幽閉され殺害されたことが示される。同様の記述は、『祈祷鈔』（六七五頁）、『法蓮鈔』（九三五～九三六頁・九四〇頁）、『妙一尼御前御返事』（九九九～一〇〇〇頁）等にもみえ、特に『祈祷鈔』（六七五頁）では「父を終に一尺の釘七ッをもてはりつけになし奉りき」、『法蓮鈔』（九四〇頁）では「賢王にてとがもなかりし父の大王を一尺の釘をもて七処までうちつけ、はつけ（磔）にし」などと、阿闍世によって足を刺された故事が引かれる。

なお、『日女御前御返事』（一五一六頁）では、国主の積功累徳が後代の安寧につながる例として、殷周革命を起こした文王の故事とともに引き合いに出され、

周の文王は老たる者をやしなひていくさに勝チ、其末三十七代八百年の間、するゑずゑには、ひが事ありしかども、根本の功によりてさかへさせ給ふ。阿闍世王は大悪人たりしかども、父びんばさら王の仏を数年やしなひまいらせし故に、九十年の間位を持

給ヒき。

と、頻婆娑羅王が釈尊を供養した功徳によって阿闍世王の悪業が変じ、永年に在位を保てたと説いている。これは、阿闍世が釈尊入滅にあたり改心して仏教の外護者になったこと（後述）との関連で述べられているものと思われる。

（四）優填王・優陀延王

梵名Udayana（ウダヤナ）。優填・于●・優陀延などと音写。漢名は、出愛・日子などと訳される。

釈尊在世中のコーサンビ国（Kosambi、●●弥国）の王（『四分律』）。釈迦在世中の仏教を保護した王として知られ、また仏像造立の初めとして賞賛される。

王の帰仏の因縁は、『優填王経』等に記される。優填王は、コーサンビ国より后に迎えた無比の奸言を信じ、正后の舎摩を箭で射殺しようとしたが、箭は舎摩の周囲を三匝して王の前に戻った。王は懼れをなしてその理由を舎摩に尋ねたところ、舎摩はかつて釈尊の教化に浴して優婆夷となり、王を哀愍して慈心定に住していたので害心およばなかったことを告げ、釈尊に帰命するよう王を諭した。王はただちに仏所に至り、優婆塞となったと伝えられる。

また、釈尊が亡き悲母のマーヤ（Maya、摩耶）を導くため三十三天に上昇した際、優填王は釈尊を三ヶ月拝せないこと憂い、病にかかってしまった。群臣は議して如来の形像を造り王の病を治癒せんと進言し、王の勅命を得て牛頭栴檀をもって高さ五尺の形像（一説に七尺の坐像）を造立したところ、王の病がたちまちに癒えたという。波斯匿王はこれを聞き、紫磨黄金をもって五尺の仏像を造立したので、閻浮提に二躯の仏の形像が現れるに至った（『大方便仏報恩経』『観仏三昧海経』『大乗造像功徳経』『大唐西域記』）。清涼寺式釈迦像は、これを模したものと伝えられる。

なお『増一阿含経』（『正蔵』二巻六八一頁c）には、波斯匿王・毘沙王（頻婆娑羅王）・優填王・悪生王（波瑠璃王）・優陀延王の五人の王名が挙げられており、優填王と優陀延王は別人ともされる。

日蓮聖人の優填大王解釈については、龍門義通氏の先行研究[3]でも指摘されている通り、日蓮聖人は、閻浮提初の仏像を造立した王として引く『法蓮鈔』（九四一頁）、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）、『日眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）などにおいては「優填大王」と表記し、賓頭盧尊者を蔑如した王として引く『神国王御書』（八九一頁）、『四信五品抄』（一二九九頁）、『下山御消息』（一三三四頁）などにおいては「優陀延王」と表記して使い分けているので、同一人物と見なしていたか否かは詳らかでない。

具体的に、前者の優填王については、いずれも生身の仏を造立した王として讃えられ、例えば、『日眼女釈迦仏供養事』（一六二四頁）には、

昔優填大王、釈迦仏を造立し奉リしかば、大梵天王・日月等、木像を礼しに参り給ヒしかば、木像説テ云ッ、我を供養せんよりは優填大王を供養すべし等云云。影堅王の画像の釈尊を書キ奉リしも又々如レシ是ノ。

と示される。ここでは、優填王とならんで頻婆娑羅王（影堅王）の造像の事蹟が示され、同様の記述は、『四条金吾釈迦仏供養事』（一一八四頁）にも確認されるが、頻婆娑羅王の造像の典拠は未詳である。あるいは伝承で言われる波斯匿王の故事をさすものかも知れ

ない。

一方、後者の優陀延王については、例えば『下山御消息』（一三三四頁）では、

日蓮が出現して、一切の人を恐レず、身命を捨てて指シ申サば、賢なる国主ならば子細を聞キ給フべきに聞カず、用ヒられざるだにも不思議なるに、剰へ頸に及ばんとせしは存外の次第也。（略）夏ノ桀王は竜蓬が頭を刎ね、殷ノ紂王は比干が胸をさき、二世王は李斯を殺シ、優陀延王は賓頭盧尊者を蔑如し、檀弥羅王は師子尊者の頸をきる。武王は恵遠法師と諍論し、憲宗王は白居易を遠流し、徽宗皇帝は法道三蔵の面に火印をさす。此等は皆諫暁を用ヒざるのみならず、還ッて怨を成せし人々、現世には国を亡し身を失ヒ、後生には悪道に堕ツ。

などと譬説する。賢人の諫言を用いなかった国主が、失位・亡国の末路を辿ったことを、后の妹喜を寵愛し諫臣の龍逄を殺害して夏王朝を滅ぼした桀王、后の妲己を寵愛し諫臣の比干を殺害して殷王朝を滅ぼした紂王、趙高の奸計により有能な宰相李斯を殺害した秦王朝第二世胡亥、付法蔵の師子尊者を殺害し天竺の仏法を断絶した檀弥羅王（後出）、三武一宗の廃仏毀釈の第二を断行した北周第三代皇帝の高祖武帝宇文王、白居易の諫言を用いずこれを左遷した唐王朝第一一代皇帝の憲宗、道教庇護の政策を諫めた法道を処罰し仏教を抑圧したため国位を喪失した北宋第八代皇帝の徽宗などを先例として引いている。なお、『神国王御書』（八九一頁）には、優陀延王・徽宗皇帝のほかに、北宋を滅ぼした欽宗皇帝、仏教を弾圧した訖利多王（後出）の故事が引かれる。これらの国主に対する日蓮聖人の認識は、「賢なる国主」にあらざる国主とみなしていることが読み取れる。

（五）阿耆達王・阿耆多王

梵名Agnidatta（アグニダッタ）。阿耆達・阿耆多・阿祇達などと音写する。釈尊在世中のコーサラ国（Kosala）舎衛城の婆羅門の王。阿耆達王はスダッタ（須達多）との論議によって釈教を知り、祇樹給孤独園の釈尊のもとへ往き教えを聴聞し、安居に釈尊を招聘した。釈尊は五百の比丘とともに阿耆達王のもとを訪れたが、王は五欲の享楽にふけり供養するのを忘れ、釈尊は馬に食わせる麦を施され、三ヶ月九〇日間の長きに及んだという（『大智度論』『興起行経』等にみえる「九横の大難」の一）。三月の安居を終え、釈尊が去ろうとした時、阿耆達は非善を悔い、釈尊の教えによって法眼浄を得たという（『中本記経』）。

日蓮遺文では、釈尊に九横の大難を蒙らせた国王として、『開目抄』（五六四頁・前出）、『法華行者値難事』（七九七頁）、『上野殿御返事』（一三〇七頁）、『聖人御難事』（一六七二頁）など諸書において波斯匿王・波瑠璃王・阿闍世王らとともに引かれ、その内容も「一夏九十日、馬のむぎをまいりし」（一三〇七頁）、「馬の麦をもんで九十日」（一六七二頁）などと示される。ほかに、『断簡二七七』（二九六三頁）には、阿耆多王を「悪王」と定めた表現が確認される。

（六）波瑠璃王

梵名Vidudabha（ヴィドゥーダバ）。毘瑠璃・毘流勒・毘楼勒・琉璃・瑠璃・毘盧釈迦・波瑠璃・破瑠璃などと音写、漢名は、増長と訳し、悪生王とも呼ばれた。

波斯匿王の子で、父王のあとコーサラ国（Kosala）舎衛城の王についた。在位は、前六

世紀頃または前五世紀頃。釈迦族の下女を母（末利夫人）にもつ出自を聞かされ、また釈種の侮辱を受けたことで逆害の心を抱くようになり、父王を放逐して王位を簒奪すると、三度目の出兵で釈迦族を殲滅した（『有部毘奈耶雑事』）。カピラヴァストゥ（Kapilavastu、迦毘羅城）に侵攻した波瑠璃王は、マハーナマ（摩訶男）をはじめとする釈種九百九十九万人を殺し、また五百人の釈女を弄ぼうとしたが頑なに拒まれたので、手足を切って深坑に埋めた。ついで舎衛城に還ると、父王の太子ジェータ（祇陀）が妓女と享楽にふけっているのを目の当たりにし、怒ってこれを殺した。

時に釈尊は、諸比丘を率いて迦毘羅城に至り、五百の釈女のために法を説き、みな法眼浄を得て天上に生ぜしめた。更に舎衛城に赴き、波瑠璃王が七日後に亡びることを予記した。

王は七日目になって何事も起こらなかったので、阿脂羅川で兵衆や●女と娯楽していたところ、夜半に暴風疾雨おこり、王は死して阿鼻地獄に入り、その宮殿も悉く天火に焼かれたという（『法句譬喩経』『五分律』）。『大唐西域記』には、王が最初の出兵の際に釈尊を見て軍を引き返した旧跡、王が堕獄した大涸池、釈迦族の供養のために建てられた卒堵婆などの所在が記されている。

なお、波瑠璃王の歿後、迦毘羅国は、阿闍世王によって兼併された。

日蓮遺文では、九横の大難にも数えられる「琉璃殺釈」（七九七頁）の故事を引く際に、波瑠璃王の名がみえる。また、その具体的内容も、『顕謗法鈔』（二六三頁）に「波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血ながれて池をなせし」、『開目抄』（五六五頁）に「無量の釈子は波瑠璃王に殺サれ」、『祈祷鈔』（六七〇頁）に「波瑠璃王の五百人の釈子を殺し」、『妙心尼御前御返事』（一一〇三頁）に「はるり王と申せし悪王、仏のしたしき女人五百余人を殺シて候し」、『上野殿御返事』（一三〇七頁）に「さればはるり王と申せし王は阿闍世王にかたらはれ、釈迦仏の御身したしき人数百人切リころす」、『聖人御難事』（一六七二頁）に「無量の釈子の波瑠璃王に殺サレし」などと説かれている。

『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）には、破仏・破法の王として弥羅掘王（大族王）・弗沙弥多羅王・設賞迦王らとともにあげ、

毘瑠璃王ハ殺ス二七万七千ノ諸ノ得道ノ人ヲ一。月氏国ノ大族王ハ滅ニ毀シ一卒塔婆ヲ一廃スルコトニ僧伽藍ヲ一凡一千六百余処、乃至大地震動シテ堕ニ二無間地獄一ニ。毘盧釈迦王ハ生ケ取リ釈種九千九百九十万人ヲ一並ベ従テ殺戮ス。積屍如レ莽ノ流血成レ池ヲ。弗沙弥多羅王ハ興シテ四兵ヲ一回ラシ二五天ヲ一殺シ二僧侶ヲ一焼ク寺塔ヲ一。設賞迦王ハ毀ニ壊ス仏法ヲ一。訖利多王ハ斥ニ逐シ僧徒ヲ一毀ニ壊ス仏法ヲ一。

とみえる。なお、遺文中には毘瑠璃王と毘盧釈迦王と個々に挙げているが、日蓮聖人が両者を別人と認識していたか否かは定かではない。

また、波瑠璃王の釈種虐殺の故事は、『祈祷鈔』（六七〇頁）、『報恩抄』（一一九九頁）などにおいて、第六天魔王（他化自在天）による悪鬼入其身の例として阿闍世王・提婆達多・瞿伽利とともに引かれることもある。

波瑠璃王が阿脂羅川で堕獄した故事について触れた遺文としては、『神国王御書』（八九一頁）がある。

釈子を殺せし波琉璃王は水中の大火に入リ、仏の御身より血を出せし提婆達多は現身に阿鼻の炎を感ぜり。金銅の釈尊をやきし守屋は四天王の矢にあたり、東大寺・興福寺を焼キし清盛入道は現身に其身もう（燃）る病をうけにき。彼等は皆大事なれども

日蓮が事に合すれば小事なり。小事すら猶しるしあり。大事いかでか現罰なからむ。ここでは、『金光明最勝王経』四天王護国品所説の四天王像を頭にいただく聖徳太子ら崇仏派によって滅ぼされた排仏派物部守屋[4]や、天照・八幡の百王守護に背いて南都北嶺の寺を焼いた平清盛らの因果応報[5]とともに、波瑠璃王・提婆達多の生身堕獄を引き、仏子日蓮を迫害する者への現罰について言及している。

なお、『千日尼御返事』（一七六二～一七六三頁）において、波瑠璃王が父の波斯匿王から王位を簒奪した故事、頻婆娑羅王が太子阿闍世によって幽閉され命終した故事について触れ、「抑子はかたきと申経文もあり（略）はるり王は心もゆかぬ父の位を奪取る。阿闍世王は父を殺せり」などと説いているのは、父子敵対の先例として用いたものである。

（七）阿闍世王

梵名Ajātasatru（アジャータシャトル）。阿闍世・阿闍貰・阿闍多設咄路・阿闍多沙兜楼などと音写し、漢名は未生怨・法逆と訳される。釈尊在世中の中印度マガダ国王。在位は、前五世紀初頭頃。父は頻婆沙羅王、母は韋提希夫人（一説に波斯匿王の妹）という。父王を殺害し、提婆達多にそそのかされて釈尊を迫害したが、後に改心し仏滅後の第一結集の際に大檀越として仏教を外護した。

阿闍世の出生に関して、『大般涅槃経』等によれば、老年になって子宝に恵まれなかった頻婆娑羅王が、王舎城五山の一つヴィプラ（毘富羅）山に住する仙人が近々死んで托生することを告げられ、これを待ちきれず殺したところ、間もなく夫人が懐妊した。これ生まれざる前に、すでに怨みを懐く意味で「未生怨」と呼ばれる。然るに生まれるにあたり相師に占わせると、生兒が怨を懐き父王を害すだろう、と告げたので、頻婆娑羅王はこれを信じるようになり、楼上から我が子を投げ捨てたが、一指を折ったのみで死ななかった。これ故に阿闍世をBalaruci（バラルシー、婆羅留支・折指）とも称した。

その後、成長した阿闍世王は、父王の帰依する釈尊とその教団に反抗し新教団を形成せんとしていた提婆達多に唆されて逆心を起こし、その言を入れて父王を幽閉し、また母が身体に蜜を塗って王に施していた事を知るや母も幽閉せしめた。

父王が獄中で命終すると、阿闍世は殺父の罪を悔い、その重圧で身体に悪瘡を患った。そして医者であるジーヴァカ（Jivaka、耆婆）の導きにより、釈尊のもとへ赴くよう勧められた。時に釈尊は、クシナガラ（Kusinagara、拘尸那掲羅）で涅槃に入ろうとしていたが、阿闍世を救うために涅槃に入るのをとどめ、阿闍世の悪瘡を治癒した。これにより、阿闍世は菩提心を起こし、仏教に帰依し教団を支援するようになったと伝えられている。

なお、これより以前、波斯匿王の子の波瑠璃王が、釈迦族を殲滅した後に夭折すると、阿闍世王は迦毘羅国を兼併している。

釈尊の荼毘が終わり、その遺骨を八分せし時、王はその一分を得て、王舎城に舎利塔を建立して供養したと伝えられる。釈尊入滅後は、四隣を服して中印度の盟主となり、仏滅後の第一結集には、大檀越としてこれを外護したといわれる。

日蓮聖人の阿闍世王解釈については、すでに原慎定氏の先行研究[6]がある。いま、氏の研究を参考としつつ、日蓮遺文を拝読すると、遺文では、阿闍世を提婆達多や外道との関係の中で取り上げることが多いことに気付く。

例えば『法華題目鈔』（三九八～三九九頁）では、

提婆達多は（略）阿闍世太子をかたらいて云々、我は仏を殺シて新仏となるべし。太子は父の王を殺シて新王となり給へ。阿闍世太子すでに父の王を殺せしかば提婆達多又仏をうかがい、大石をもちて仏の御身より血をいだし、阿羅漢たる華色比丘尼を打ちころし、五逆の内たる三逆をつぶさにつくる。

などとみえる。このほか、『顕謗法鈔』（二六二～二六三頁）、『開目抄』（五八九頁）、『法華取要抄』（八一二頁）、『報恩抄』（一一九九頁）、『諫暁八幡鈔』（一八三八・一八四一頁）などにおいて、提婆達多は、瞿伽梨や善星比丘らを弟子とし、阿闍世を信者として無量の五逆謗法の者を集め、釈尊とその教団に敵対したことが述べられ、また、阿闍世がこの提婆達多を悪知識として父母を害したことが、『祈祷鈔』（六七五頁）、『法蓮鈔』（九三五～九三六・九四〇頁）、『上野殿御返事』（一三〇六頁）、『千日尼御返事』（一七六三頁）等にみえ、『開目抄』（五六四～五六五頁）、『上野殿御返事』（一三〇七頁）、『聖人御難事』（一六七二頁）では、酔象を放ちて釈尊に危害を加えようとしたこと（九横の大難の一）が指摘される。

阿闍世が、提婆達多以外にも諸々の外道の奸計によって釈尊に敵愾心を抱くようになったことについては、『開目抄』（五五七頁）、『法華行者値難事』（七九六頁）、『断簡一八四』（二五三五頁）等において、『大般涅槃経』●陳如品（『正蔵』一二巻五九一頁ｃ）を典拠として引く。

また、『法華取要抄』（八一二頁）では、日蓮聖人当時の日本国が一同に釈尊を忘失し、他仏を頼みとしてることを非難する譬説中に、「此等ノ諸師並ヒニ檀那等忘テ釈尊ヲ取ルコトハ諸仏ヲ者、例セハ如シ下阿闍世太子ノ殺シ頻婆沙羅王ヲ、背テ釈尊ニ付キシカ中提婆達多ニ上也」とみえる。

この悪逆非道の限りを尽くした阿闍世が、自業自得果を受けて、堕獄の先相として悪瘡を生じ、生きながらにして堕地獄の苦を味わったことについて、『可延定業御書』（八六二頁）には、

阿闍世王は御年五十ノ二月十五日、大悪瘡身に出来せり。大医耆婆が力も及ハず。三月七日必死シて無間大城に堕ツべかりき。五十余年が間ノ大楽一時に滅して、一生の大苦三七日にあつまれり。定業限リありしかども、仏、法華経をかさねて演説して、涅槃経となづけて大王にあたえ給ヒしかば、身の病忽に平愈シ、心の重罪も一時に露と消ヱにき。

とみえ、また『法蓮鈔』（九四〇頁）にも同様に、悪瘡発症の時期、堕獄の時期と期間などが詳述され、また阿闍世が後に改心して釈尊に帰仏し、涅槃経の説会において聞法した法華経の経力によって、これら大苦を免れたことが示される。ほかにも、悪瘡の故事は、『高橋入道殿御返事』（一〇九一頁）、『太田入道殿御返事』（一一一五～一一一六頁、一一一八頁）、『光日房御書』（一一五九～一一六〇頁）、『中務左衛門尉殿御返事』（一五二四頁）、堕獄の故事は、『神国王御書』（八八八頁）、『三三蔵祈雨事』（一〇六五頁）などにみえる。

すでに述べてきたことからも分かるように、釈尊在世中の破仏・破法の暴君には波瑠璃王と阿闍世王がいるわけであるが、両者のうち阿闍世王には仏陀による救済が説かれる点が特徴的である。釈尊にとっても、阿闍世王が救治すべき病子であったことは、『大般涅槃経』梵行品（『正蔵』一二巻四八一頁ａ）に七子の喩をもって説かれるところであり、日蓮聖人も『妙一尼御前御返事』（九九九～一〇〇〇頁）において、この文を引いて「我

涅槃すべし。但心にかゝる事は阿闍世王耳」「今日より悪瘡身に出て、三月の七日無間地獄に墮ッべし。これがかなしければ、我涅槃せんこと心にかゝる」などと解釈している。

阿闍世王の帰仏については、善知識となった良医耆婆らの導きがあったことが、『四条金吾殿御返事』（一六六六頁）に「阿闍世王は仏の御怨なりしが、耆婆大臣の御すゝめによて、法華経を御信じありて代を持ㄔ給ㄱ」と説示され、ほかにも『守護国家論』（一二三頁）、『顕謗法鈔』（二六一頁）、『開目抄』（五七五頁）、『崇峻天皇御書』（一三九一頁）などに同様の説示がみえる。なお、これと関連して、阿闍世が、天より日（または月）の落ちる夢見について耆婆ら諸臣に問うたところ、仏滅を予告されたことが、『撰時抄』（一〇四五頁）、『報恩抄』（一二三〇頁）等に引かれる。

阿闍世王は、釈尊の入滅に際し涅槃経の説法を聞いて救われたわけであるが、王が涅槃経の前に説かれた法華経の序品（『開結』五九頁）にも列座していることについて、日蓮聖人は、『撰時抄』（一〇〇三頁）において、「霊山会上の砌には閻浮第一の不孝ノ人たりし阿闍世大王座につらなり、一代謗法の提婆達多には天王如来と名をさづけ（以下略）」と阿闍世は、法華経の提婆達多品の説時において提婆達多の悪人成仏の記別を聞法したことを指摘する。法華経における提婆達多の記別によって一切の悪人に未来成仏が保証され、続く涅槃経で阿闍世王が闡提成仏の代表として救われるのである。涅槃経における阿闍世の救済の因はあくまでも法華経の教えによるものであり、日蓮聖人も『富木尼御前御書』（一一四八頁）において、「阿闍世王は法華経を持ㄔて四十年の命をのべ」と指摘する。

三、マウリヤ王朝期・シュンガ王朝期の王

マウリヤ朝（Maurya、孔雀王朝）は、前三一七年頃～前一八〇年頃に、古代印度マガダ国に興った王朝である。前三一七年頃、チャンドラグプタ（Chandragupta、旃陀羅崛多）によって建国された。アショーカ王（Asoka、阿育王）の時代に全盛期を迎え、南端部分を除く印度亜大陸全域を統一した。しかし王の歿後、国家は分裂し、前二世紀初頭、シュンガ（Sunga）朝の勃興により滅亡した。

本項では、釈尊滅後の印度・西域における仏法の興廃について、マウリヤ王朝期の阿育王、シュンガ王朝期の弗沙弥多羅王を取り上げ、日蓮聖人の歴史認識を確認してみたい。

（一）阿育王

梵名Asoka（アショーカ）。阿輸迦・阿輸伽・阿育などと音写し、漢名は無憂と訳す。祖父チャンドラグプタの悲願であった統一国家建国の事業を継承し、印度史上初の統一国家マウリア王朝（Maurya、孔雀王朝）を建国した。釈尊滅後およそ百年または二百年頃に出世したマウリア王朝第三代皇帝で、在位は前二六八～二三二年頃とされるが、王の出世年代・治世年代については諸説がある。

若き頃は暴虐な性格で、タクシラ国（Taksasila、徳叉●羅）の反乱を平定してからは、権威を強め、父王の歿後、兄弟を殺して王位についた。

王は婆羅門の出身で、『小磨崖法勅』によれば、即位後八年目頃（前二六〇年頃）に仏教に改宗したといわれるが、二年半は単に優婆塞に留まり、信仰は熱心ではなかったと伝える。治世九年目にカリンガ国（Kalinga、羯●伽）を攻めた征服戦争が、アショーカの宗教観に大きな影響を及ぼすことになる。このカリンガ戦争では、数十万人の死傷者を出

し、十五万人が捕虜となって国内各地に送られた。『大磨崖法勅』によれば、王は、このことを悔い、二百年の長きに及んだマガダ国による武力政策を改め、以後、対外遠征には消極的になり、法（dharma）による統治（法の政治）に専念するようになったという。仏教に深く帰依したのも、この頃とされる。王は、征服戦争を放棄すると、仏教の理想を実現するための政策を行った。治世一〇年目頃から仏跡を巡礼（法の巡幸）し、国民に法を弘めるために各地に法勅を刻んだ。このほか、道路や街路樹の整備、宿泊所・井戸の設置、人間や動物の施薬院の創設などの社会福祉事業も行ったという。

王自身は仏教徒であったが、仏教以外のあらゆる宗教も平等に保護した。阿育の摩崖碑文などで「法の政治」の内容として繰り返し伝えられるのは、慈悲・不殺生の精神に基づいて異民族・異文化との共生を説くものであった。また、王の援助で、首都パータリプトラ（Pataliputra、華氏城）にて第三結集が開かれたが、年代や討議の内容は詳らかでない。なお、『阿育王伝』『雑阿含経』『善見律毘婆沙』等には、阿育王は八万四千の僧伽藍を建て、八万四千の仏塔を造ったと伝えるが、王の法勅には確認されない。

アショーカ王は晩年、地位を追われ幽閉されたという伝説があり、また実際に治世末期の碑文などが発見されておらず、政治混乱が起こった事が推測される。原因については諸説あるが、宗教政策重視のために財政が悪化したという説や、軍事の軽視のために外敵の侵入に対応できなくなったなどの説が唱えられている。

日蓮遺文中において、阿育王の業績を具体的に挙げて称讃する遺文は少なく、『兵衛志殿御返事』（一六〇五頁）に、頻婆娑羅王の故事と併記して、「阿育大王の十億の沙金を鶏頭摩寺にせゝし」とみえる程度である。鶏頭摩寺（Kukkutarama）は、阿育王によって華氏城近郊に建立された精舎で、後に弗沙弥多羅王（後出）によって蹂躙されている。

日蓮聖人の阿育王解釈については、廣田哲通氏や龍門義通氏の先行研究[7]でも指摘されるように、釈尊の所説あるいは未来記が真実であることの傍証として、仏滅後百年目の阿育王の出世を予言した『雑阿含経』（『正蔵』二巻一六二頁ａ）・『阿育王経』（『正蔵』五〇巻一三二頁ａ）などにみられる仏記を挙げるものが多い。『法蓮鈔』（九四二頁）に、

又仏記し給ふ。我滅度の後一百年と申サンに阿育大王と申ス王出現して、一閻浮提三分の一分が主となりて、八万四千の塔を立テ我舎利を供養すべしと云云。人疑ヒ申サンほどに案の如くに出現して候き。是よりしてこそ信心をばとりて候つれ。又云ク、我滅後に四百年と申サンに迦弐色迦王と申ス大王あるべし。五百ノ阿羅漢を集メて婆沙論を造ルべしと。是又仏記のごとくなりき。是等をもてこそ仏の記文は信ぜられて候へ。

とみえるがごときである。阿育王の仏舎利塔建立の事蹟については、『安国論御勘由来』（四二三頁）、『開目抄』（五六〇頁）にも同様の記述が確認される。

また、阿育王が一閻浮提の大王として君臨することとなった由縁として、百年前、前生に徳勝（得勝）童子であった時、釈尊に対して戯れに沙餅を供養した功徳を挙げる例が、『白米和布御書』（一一三二頁）、『松野殿御消息』（一一四二頁）、『兵衛志殿御返事』（一五〇五～一五〇六頁）、『九郎太郎殿御返事』（一六〇三頁）、『随自意御書』（一六一八頁）、『窪尼御前御返事』（一六四五頁）、『王日殿御返事』（一八五三頁）、『断簡一六三』（二五二八頁）などにみえる。この故事の典拠は、『阿育王伝』（『正蔵』五〇巻九九頁ｂ～）などに求められる。

なお、写本遺文には、龍王・鬼神を従えて征服戦争を起こした「悪王」として阿育王を

紹介する例が、『法華初心成仏鈔』（一四二二頁）、『上野殿御返事』（一四五〇頁）、『新池殿御消息』（一六三九頁）などにみえるが、真蹟遺文中にはこのことに言及した記述はみえない。

（二）弗沙弥多羅王

梵名Pusyamitra（プシャヤミトラ）。弗沙弥多羅・弗沙蜜多羅・弗舎密多羅などと音写し、漢名は星友と訳される。在位は、前一八〇年頃～前一四四年頃。

前一八〇年頃、マウリヤ王朝（Maurya）のブリハドラタ王（Brhadratha）を殺して王位につき、シュンガ王朝（Sunga）を建国した。首都パータリプトラ（Pataliputra、華氏城）を拠点にガンジス河流域の北印度を支配し、バラモン教を復興して仏教を抑圧した。鶏頭摩寺を再三にわたって攻撃したほか、カシミールまで攻め入って、多くの仏塔や伽藍を破壊し、また修行僧を殺戮するなど、各地の僧伽に危害を加えたといわれる。北印度を併合して馬祀（asva-madha）の大祭を行い、在位三六年で歿した。

王が、仏教を弾圧した理由について、『雑阿含経』『阿育王経』では、阿育王の起塔行施をこえる偉業を後世に伝えるために大悪事をなして名声を高めようと決意し、破仏を行ったとある。シヴァ神崇拝をする弗沙弥多羅王は、マウリヤ王朝が進めてきた仏教保護の政策に反動し、バラモン教の復興を図ったことがわかる。

なお、『雑阿含経』『阿育王経』『舎利弗問経』では弗沙弥多羅王をマウリヤ朝最後の王とするが、これら仏典は、弗沙弥多羅王の仏教弾圧とマウリヤ王朝の滅亡とを結びつける意図のもと編まれたためで、考古学的な発見によってマウリヤ朝の最後の王はブリハドラタとするのが正しいことがわかっている。

日蓮遺文では、仏法を破壊した悪王として、釈尊在世中の波瑠璃王、中国唐朝第一五代武宗皇帝（会昌の廃仏）、排仏派の物部守屋ら三国の廃仏毀釈の例示とともに引き合いに出されることが多く、その悪行は、『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）に「弗沙弥多羅王、興二四兵一回二五天一殺二僧侶一焼二寺塔一。」、『曽谷入道殿許御書』（九〇〇頁）に「彼弗舎密多羅王ノ焼二失シ五天ノ寺塔一」、『法蓮鈔』（九五四頁）に「月支には弗沙密多羅王の五天の仏法を亡し、十六大国の寺塔を焼キ払ヒ、僧尼の頭をはねし」、『強仁状御返事』（一一二三頁）に「彼月支ノ弗沙弥多羅王ノ焚二焼シ八万四千ノ寺塔一刎ネシ無量ノ仏子之頸一」などと記されている。『法華取要抄』（八一七頁）にも同様の記述がみえるが、これらの譬説ではいずれも、当世日本における国中の謗法が、これと同等あるいはそれ以上であることを指摘するのが特徴である。

四、クシャーナ王朝期の王

阿育王の歿後、マウリヤ王朝は分裂・衰退し、ついに滅亡するとギリシア人やパルチア人が各地に侵入し勢力を競い合うようになった。前二世紀頃、北西印度を支配したギリシア人のバクトリア王ミリンダ（Milinda、メナンドロス王・弥蘭王・弥蘭陀王）は、仏教に帰依した王として知られる。

同じ頃、匈奴に追われて西遷した遊牧民の大月氏は、中央アジアのバクトリアに定着した。その支配下にあったトカラ族の五翕侯（きゆうこう）のひとり貴霜（Kusana）は、紀元前後に大月氏にとってかわり、他の四翕侯を支配してクシャーナ王朝を創設した（『漢書西域伝』）。

首都はペシャワール（Purusapura、布楼沙補羅）。

こうして誕生したクシャーナ朝は、中央アジアから北印度にかけて、一世紀から三世紀頃まで栄えた。クシャーナ朝は、シルクロードの主な都市を支配したので、ギリシア・ローマや中央アジア・中国の文化が出逢い、ガンダーラ美術・マトゥーラ美術などの芸術様式をはじめとする国際色豊かな融合文化が開花した。

日蓮聖人は、遺文中においては、クシャーナ王朝期の代表的な王として迦弐色迦王・屹利多王・雪山下王の故事を引く。

（一）迦弐色迦王・迦弐志迦王

梵名は、Kanishka（カニシカ）。迦弐色迦・迦弐志迦・迦膩色迦などと音写。クシャーナ王朝にはカニシカ二世がいたことが知られるが、一般的には第四代君主カニシカ一世をさすことが多い。生歿年は未詳、治世は一二九～一五二年頃とされるが異説も多い（七八年登位説・一四四年登位説など。『雑宝蔵経』『出三蔵記集』『婆藪槃豆法師伝』『大唐西域記』ほか）。クシャーナ王家の出自で、帝国を拡大したヴィマ・カドフィセス王（Wema-Kadphises、閻膏珍王）の子にあたる。

王が仏教に帰依した由縁については、『雑宝蔵経』『付法蔵因縁伝』『大唐西域記』などに諸説が説かれるが、領民が多く仏教徒であったことから、施策上、仏教を奉じたとも言われている。いずれにせよ、王が仏教を外護し、各地に仏塔を建造したことは、多くの仏典の所説から明らかで、カシミールでは説一切有部の阿羅漢五百人を集めて『大毘婆沙論』二百巻を作成した。王はまた、のちの大乗経典のもととなった三蔵を編纂する第四結集の援助をしたとも伝えられている。

また王が、詩人アシュバゴーシャ（Asvaghosa、馬鳴）と親交を結んだこともよく知られるところである。カニシカ王は中央印度の華氏国を攻撃した際、現地の王に和平を請われ、和議の要償として三億金（『付法蔵因縁伝』では九億の金宝）を要求した。現地の王がこれを支払い不可能であると回答すると、二億金を減額する代わりに馬鳴を送るように要求した。王は、馬鳴・僧伽羅刹・祇夜多らに師事し、また馬鳴・大臣マータラ（摩●羅）・医師チャラカ（遮羅迦）の三智人は、カニシカ王の親友・善知識となったという（『雑宝蔵経』）。

王の歿後の王統の興廃は詳らかでないが、王にふたりの王子がいたと伝えるものもあり（『付法蔵因縁伝』）、あるいは王の歿後、訖利多（krita）出身の者が王を自称し、僧徒を逐斥して仏法を毀壊したとも伝える（『大唐西域記』）。

仏教をあつく保護した迦弐色迦王に対する日蓮聖人の評価は高く、『顕謗法鈔』（二六五頁）では、

> 仏ノ滅後四百年にあたりて健馱羅国ノ迦弐色迦王、仏法を貴み、一夏、僧を供し仏法をといしに、一一の僧異義多シ。此王不審して云ク、仏説は定て一ならん、終ニ脇尊者に問フ。尊者答テ云ク、金杖を折て種種の物につくるに、形は別なれとも金杖ハ一なり。形の異なるをは諍フといへども、金たる事をあらそはず。門々不同なれば、いりかどをば諍へども、入理ハ一なり等ト云云。

と、仏法を外護するのみならず、仏教の教説にも深い関心を寄せていた様子が説かれている。また、『法蓮鈔』（九四二頁・前出）には、五百人の阿羅漢を集めて『大毘婆沙論』

を編纂することを予言したという仏記を挙げる。なお、阿育王が仏滅後百年の出世、迦弐色迦王が仏滅後四百年の出世とするのは、仏滅年代と両王の治世年代を比定する日蓮聖人の認識を示しているものと思われる。

なお、馬鳴の故事について『報恩抄』（一一九九頁）では「馬鳴菩薩は金銭三億かかわりとなり」とみえるが、ここには迦弐色迦王の名はみえない。また、『上野殿母尼御前御返事』（一八一五頁）には、馬鳴なる人物と輪陀王の来歴譚が引かれるが、これは『釈摩訶衍論』（『正蔵』三二巻五九四頁c～）の所説によるもので、迦弐色迦王との関係はない。

ほかにも、『善無畏鈔』（四〇八頁）・『南条殿御返事』（一〇八〇頁）などにおいて、善無畏三蔵（六三七―七三五）の伝記中に沙を金に変えた王として登場する金粟王は、迦弐色迦王をさすものとも推測されているが、年代的に合致せず、確証はない。

（二）屹利多王・訖利多王

梵名Krita。屹利多・訖利多などと音写し、漢名を買得と訳す。阿育王の命で伝道師の末田底伽（Madhyantika）がカシミール国に五百の僧院を造立するために買い集めた奴隷集団（krita）出身の王。カニシカ王の歿後、カシミール国（Kasmir、迦湿弥羅国）を支配し、仏教を弾圧したが、トカラ国（都貨邏国・大夏国）の雪山下王によってほどなく破られる（『大唐西域記』）。

日蓮遺文では、破仏法によって国を滅ぼした亡国の悪王として、『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）や『神国王御書』（八九一頁）において波瑠璃王や優陀延王に比肩される。

特に『報恩抄』（一二二四頁）では、

正法を行ずるものを国主あだみ、邪法を行ずる者のかたうどせば、大梵天王・帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入リかわりて其国をせむべしとみゆ。例せば訖利多王を雪山下王のせめ、大族王を幻日王の失ヒがごとし。訖利多王と大族王とは月氏の仏法を失ヒし王ぞかし。漢土にも仏法をほろぼしゝ王、みな賢王にせめられぬ。

と、誹謗正法の愚王（訖利多王・大族王）と護持正法の賢王（雪山下王・幻日王）との対比の中で例示され、謗法の国主が「隣国の賢王」によって滅ぼされた先例として引く。

（三）雪山下王・●摩呾羅王

トカラ国（都貨邏国・大夏国）の●摩呾羅王。仏教を破壊した屹利多王を殺害し、仏教を復興させた（『大唐西域記』）。日蓮遺文中では、如上のとおり、『報恩抄』（一二二四頁）において、「隣国の賢王」の一類として引かれる。

五、グプタ王朝期の王

マウリヤ王朝崩壊後、グプタ（Gupta）朝は、チャンドラグプタ（Candragupta、旃陀羅崛多、マウリヤ王朝の建国者とは同名の別人）一世が創設したマガダの王統を継承する統一国家で、三二〇年から五五〇年頃までパータリプトラ（Pataliputra、華氏城）を都として栄えた王朝である。王朝は、バラモン教を復興し、これと併行して仏教の大乗・小乗の教学も著しく進展したが、アフガニスタンで勃興した白匈奴エフタル（Ephthal）人が五世紀末に北西印度に侵入し、やがて帝国は滅亡する。

日蓮遺文に登場するグプタ王朝期の国王には、檀弥羅王・大族王（弥羅掘王）・幼日王（幻日王）がいる。

（一）檀弥羅王・檀弥利王

『付法蔵因縁伝』によれば、カシミール（迦湿弥羅国・●賓国）の王で、名を「弥羅掘」と呼んだとされるが、ミヒラクラ（Mihirakula）王に比定するには、時代的に符合しないとする説もある(8)。日蓮遺文中においても、両者を同一視した記述は確認されないため、今は、次下の大族王（弥羅掘王）と分けて検討する。

檀弥羅王は、邪見が熾盛で、心に信敬することなく、寺塔を破壊し、多くの僧を殺害するなど仏教を弾圧した王として知られる。

日蓮聖人がしばしば引くのは、『摩訶止観』（『正蔵』四六巻一頁b）の所説によるもので、仏滅後の仏法を付託され、印度で相伝した附法蔵第二四祖の師子尊者を殺害した故事である。これにより印度・西域における附法の伝統は絶えたという。檀弥羅王は、師子尊者を殺害した折、右臂が地に堕ちて七日後に歿したといい、これを忌んだ檀弥羅王の太子は、後に師子尊者のために塔を建てたと伝えられる。

『撰時抄』（一〇一八頁）には、

法花経をひろむる者は日本の一切衆生の父母なり（略）されば日蓮は当帝の父母、念仏者・禅衆・真言師等が師範なり、又主君なり。而ルを上一人より下万民にいたるまてあだをなすをば日月いかでか彼等の頂を照し給フべき、地神いかでか彼等の足を載セ給フべき。提婆達多ハ仏を打チたてまつりしかば、大地揺動して火炎いでにき。檀弥羅王ハ師子尊者の頭を切リしかば、右の手、刀とともに落チぬ。徽宗皇帝ハ法道が面にかなやき（火印）をやきて江南にながせしかば、半年が内にえびすの手にかゝり給ヒき。蒙古のせめも又かくのごとくなるべし。設ヒ五天のつわものをあつめて、鉄囲山を城とせりとも、かなうべからず、必ス日本国の一切衆生兵難に値フべし。

と譬説し、法華経の行者を迫害する日本国を治罰するため蒙古の兵難が到来することを確信している。ほかにも『法門可被申様之事』（四五五～四五六頁）、『転重軽受法門』（五〇七頁）、『報恩抄』（一一九九頁、一一三六～一一三七頁）、『下山御消息』（一三三四頁）等にみえる。

（二）大族王・弥羅掘王

梵名は、Mihirakula（ミヒラクラ）。弥羅掘・摩醯邏短羅などと音写。ガンダーラ（Gandhara、健馱羅国）・北印度を支配したエフタル（Ephthal）の王で、カシミール国・カンダーラ国を攻めた。ゾロアスター教系の天神火神を信仰し、仏教を弾圧し、グプタ王朝を衰亡させた。在位は五一二年～五二八年頃。『大唐西域記』（『正蔵』五一巻八八八頁c～）にみえる大族王に比定されるが、玄奘の訳語「大族」に相当する梵語はMahakuraであって、厳密にはMihirakulaとは対応しない。

西北印度に侵入し、グプタ王朝を衰亡させた弥羅掘王であったが、五二八年、マガダ国王の幻日王に捕らえられた。後に赦されると、カシミール王（Kasmir、迦湿弥羅王）に礼遇され、領土を与えられるが、歳月が過ぎると、領民を率いて王を討ち、かえって王位についた。更にガンダーラを征服し、王族・大臣をはじめ多数の人民を虐殺し、寺塔を破壊

し、僧尼を殺害するなど大規模な仏教弾圧を行なった（『蓮華面経』『大唐西域記』『仏祖統記』）。その後、カシミールに還ったが、まもなく歿したという（『大唐西域記』）。弾圧された仏教側では、この事件を契機に末法思想が盛んになり、東アジアに伝えられることとなる。

日蓮聖人は『顕謗法鈔』（二六二～二六三頁）において、大荘厳仏の末法の四比丘、摩尼跋陀にそそのかされた殺人鬼鴦崛摩羅、苦得外道の教えに従った善星比丘、提婆達多の徒となり釈尊とその教団に危害を加えた阿闍世王・瞿伽利比丘をはじめ、大族王、波瑠璃王、設賞迦王、三武一宗の廃仏毀釈の第二を行った周の高祖武帝宇文王などの故事をもって悪知識・悪鬼入其身の恐ろしさを例示する中に、

大族王の五竺の仏法僧をほろぼせし、大族王の舎弟は加湿弥羅国の王となりて、健駄羅国の率都婆・寺塔一千六百所をうしなひし（略）此等皆悪師を信じ悪鬼其の身に入りし故也。

と説く。ここでいう「大族王の舎弟」とは、大族王が幼日王に虜われた後にカシミール国王となった実弟のことで、やはり『大唐西域記』にみえる。また『撰時抄』（一〇五一頁）には、三武一宗の第三（会昌の廃仏）を行った唐の武宗皇帝と併記して、「大族王の五天の堂舎を焼キ払ヒ十六大国の僧尼を殺せし」とその悪業を記す。ほかにも、『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）、『撰時抄』（一〇五二頁）、『報恩抄』（一二二四頁）などに破仏法の暴君として引かれる。

（三）幼日王・幻日王・新日王

梵名は、Baladitya（バーラーディトヤ）。幼日王・幻日王・新日王などと呼ばれる。世親（Vasubandhu）の時代（四〇〇～四八〇年頃）のマガダ国王で、ナーランダ寺（Nalanda、那爛陀寺）に一院を造った。世親に帰依し、仏教を外護した。カシミール・カンダーラを席巻し仏教を破壊する暴君ミヒラクラ王を投獄した王として知られる。『婆藪槃豆法師伝』では、幼日王はチャンドラグプタ（Candragupta）一世の太子とするが、その場合は、サムドラグプタ（Samudragupta）に比定される。近年の研究では、プルグプタ（Purugupta）の太子ナラシンハグプタ（Nalasimhagupta）とする説も提唱される。

なお、『婆藪槃豆法師伝』『大唐西域記』などにより諸説ある世親年代論には、四世紀の古世親と五世紀の新世親の二人説が提唱されているが、『婆藪槃豆法師伝』の記述に、世親が超日王（スカンダグプタ・Skandagupta、ヴィクラーマディトヤ・Vikramaditya、在位四五二～四八〇年）と幼日王（ナラシンハグプタ・Nalasimhagupta、Baladitya・バーラーディトヤ）の愛顧をそれぞれ受けたとされるところから、幼日王の帰依した世親は、後者の年代に属することが推測されている[9]。

日蓮遺文では、前述の通り、『撰時抄』（一〇五二頁）、『報恩抄』（一二二四頁）等において、謗法の国主を降伏せしめた善王として讃えている。

六、ヴァルダナ王朝期の王

四世紀前半に興り五世紀前葉にかけて全盛期をむかえたグプタ朝（Gupta）であったが、五世紀末にエフタル（Ephthal）の侵略によって滅亡すると、北印度は分裂状態に陥った。ヴァルダナ（Vardhana）の王プラバーカラ・ヴァルダナ（Prabhakara-Vardhana、波羅羯

邏伐弾那・光増）の長男ラージャ・ヴァルダナ（Raja-Vardhana、遏邏闍伐弾那・王増）が、ベンガル地方カルナスヴァルナ（羯邏拏蘇伐剌那・金耳国）の支配者Sasanka（シャシャーンカ、設賞迦王）の奸計による不慮の死を遂げたあと、次男ハルシャ・ヴァルダナ（Harsha-Vardhana、曷利沙伐弾那・喜増・戒日王）は、設賞迦王を討滅して兄の無念を晴らし、六〇六年、一六歳で即位、混乱のうちにあった北印度の大部分を統一した。かくしてヴァルダナ朝は、古代北印度最後の統一王朝となった。首都はカニャークブジャ（Kanyakubja、曲女城）に置かれる。

ヴァルダナ王朝期の国王として日蓮聖人が引くのは、設賞迦王と戒日王である。

（一）設賞迦王・金耳国王

梵名Sasanka（シャシャーンカ）。設賞迦と音写される。六世紀、東印度のベンガル地方にあったカルナスヴァルナ（Karna-suvarna、竭羅拏蘇伐剌那）国の王。カルナスヴァルナは別名「金耳国」とも呼ばれるので、設賞迦王は金耳国王とも称される。王は外道を信じ、仏教を弾圧、僧堂を破壊し、菩提樹を伐採したという（『大唐西域記』）。ヴァルダナ（Vardhana）朝の王子であったラージャ・バルダナを殺害するが、ハルシャ・バルダナによって討たれる。

日蓮聖人は、『顕謗法鈔』（二六二～二六三頁）、『行敏訴状御会通』（五〇〇頁）において、阿闍世王・大族王・波瑠璃王・弗沙弥多羅王らとともに破仏・破法の君主として用いるが、『顕謗法鈔』（二六二～二六三頁）に「金耳国王の仏法をほろぼせし、波瑠璃王の九千九十万人の人をころして血ながれて池をなせし、設賞迦王仏法を滅し菩提樹をきり根をほりし」と、金耳国王・設賞迦王を別に立てる理由は定かではない。

（二）戒日王・喜増王

梵名Harsa-Vardhana（ハルシャ・ヴァルダナ）。曷利沙伐弾那と音写され、漢名を喜増といい、シーラーディトヤ（Siladitya、戒日王）と号した。祖父王を戒日王一世とするので、ハルシャ・ヴァルダナは、戒日王二世となる。生歿は五九〇～六四七年、在位六〇六～六四七年。グプタ朝滅亡後の混乱のうちにあった全印度（但し南印度を除く）を統一した古代印度最後の統一王朝であるヴァルダナ朝の大王。三〇年の間、戦を起こさず、慈善を行い、善政を施した。王は、五年に一度の無遮大会を設けるなど仏教を保護し、折しも入竺した玄奘三蔵を優遇したことで知られる（『大唐西域記』）。また、王朝では仏教以外にヒンドゥー教も盛んだった。王の歿後、王に嗣子がなかったため王国は分裂し、北印度は再び混乱に陥った。

日蓮聖人は、『立正安国論（広本）』（一四七四頁）において、戒日王を「聖人」と称え、仏教外護の国王のひとりとして評価している。

また『滝泉寺申状』（一六八三頁）では、

仙豫国王（略）有徳国王（略）戒日大王・宣宗皇帝・上徳太子等、追テ此ノ先証ヲ討ニ罰ス仏法ノ怨敵ヲ。此等ノ大王ハ皆持戒ノ仁、善政流ニ未来ニ。

と、釈尊本生の仙豫国王・有徳王(100)、「会昌の廃仏」ののち仏法を復興した唐朝第一六代皇帝の宣宗、排仏派の物部守屋を打倒した聖徳太子らとともに引き合いに出す。

このほか、『開目抄』（五五三頁）では、『続高僧伝』（『正蔵』五〇巻四五一頁c）等に

依拠すると思われる、戒賢らに帰依した故事が引かれ(三)、『曽谷入道殿許御書』（九一一頁）では、諸王・衆僧を招いた一大法会の最中に火災が発生し、これを収めようと火中に身を投じたところ、仏法擁護の善根によって鎮火したという『大唐西域記』（『正蔵』五一巻八九五頁b）の故事が引かれる。

七、日蓮聖人における賢王と愚王

古代印度では、理想的帝王として、転輪聖王が想定されている。七宝・四神徳・三十二相を具足し、天の輪宝を感得して、これを四方に転じて諸小国を降伏するところから命名された、全世界統一の理想的帝王である。日蓮聖人も『法蓮鈔』（九三七頁）において、「夫レ人中には転輪聖王第一也（以下略）」と、人界の最上位の王として、その威力・権勢を説く。前述の通り、遺文中では、釈迦族の血筋を「転輪聖王の御一門」（六七四頁）と讃えるが、果たして日蓮聖人は、理想的君主、賢明なる王としての賢王・明王の存在をいかに認識していたのであろうか。本稿では、印度・西域の国王に関する説示を整理したにすぎず、中国・日本の国王をめぐる遺文中の記述を見ていないので、一面的であることは否めないが、賢王と愚王に関する日蓮聖人の認識について卑見を述べてみたい。

まず、賢王・明王の在り方について、日蓮遺文の記述を整理すると以下の例が挙げられる。

（一）円覆方載の天地の徳により万民を統治する

明王ハ因テ天地ニ而成シ化ヲ（『立正安国論』二一四・一四六二頁）

（二）道理によって世を治める

賢王の世には道理かつべし（『開目抄』五四九頁）

（三）賢者の進言に耳を傾ける

孔子は九思一言、周公旦は浴する時は三度にぎり、食スル時は三度吐キ給フ。賢人は如レク此用意をなす也。世間の法にも、はふ（法）にすぎばあやしめといふぞかし。国を治する人なんどが、人の申せばとて委細にも尋ネずして、左右なく科に行はれしは、あはれくやしかるらんに、夏ノ桀王が湯王に責メられ、呉王が越王に生ケどりにせられし時は、賢者の諫暁を用ヒざりし事を悔ひ、阿闍世王が悪瘡身に出テ他国に襲はれし時は、提婆を眼に見じ耳に聞カじと誓ヒ、乃至宗盛がいくさにまけ義経に生ケどられて鎌倉に下されて面をさらせし時は、東大寺を焼キ払はせ山王の御輿を射奉リし事を歎キし也（『下山御消息』一三四二頁）

（四）賢者の導きを得て世間の非道を破する

しかれば代のをさまらん事は、大覚世尊の智慧ノごとくなる智人世に有リて、仙豫国王のごとくなる賢王とよりあひて、一向に善根をとどめ、大悪をもて八宗の智人とをもうものを、或はせめ、或はながし、或はせ（施）をとどめ、或は頭をはねてこそ、代はすこしをさまるべきにて候へ（『智恵亡国御書』一一三〇頁）

（一）から（三）は、儒教など世法にみられる通念的な国王観に立脚した説示と思われる。日蓮聖人親写本が現存する帝王学の書『貞観政要』（日蓮聖人御親写貞観政要頒布会編『日蓮聖人御親写貞観政要』北山本門寺、一九一六年）にも、明王・聖帝をめぐる観念が数多く説かれているのは、周知の通りであり、それらの理念が日蓮聖人の国王観を形成

していることが読み取れる。また、（四）のように賢者・聖人の導きを得て、邪法・邪道を根絶する者が賢王と規定される場合も見受けられる。これらはまさに、『立正安国論』において、日蓮聖人が当時の為政者に求めた姿勢でもあった。

『立正安国論』第五番問答（二一八～二一九頁）では、被髪袒身にして礼節を失った者が祭祀を執り行うような時代に周王朝が滅亡し、蓬頭散帯にして礼儀を無視する阮藉の教えが罹蔓した末に司馬氏が亡び、会昌の廃仏によって自叛他逼の外患内憂を招いた結果、唐の武宋が身を滅ぼし、浄土教の隆盛した時代に謗法の祈祷を頼みとした結果、後鳥羽上皇が配流・崩御したことなどを述べるのも、賢王たる者は、礼節・義理・忠孝等を重んじ、賢者・聖人の導きにより正しい知見に立ち、耳に逆らう忠言・諫言をも傾聴し、必要に応じてこれを汲み上げ、的確な判断を下さなければならないとする、日蓮聖人の国王観から導き出されていることを知るのである。

一方、国を滅ぼす悪王・愚王については、以下の特色が確認される。

（一）非道を優先する

愚主の世に非道先をすべし（『開目抄』五四九頁）

（二）外道・邪法を登用し正法を滅失する

災難ハ随テ人ニ可レ有ニ大小一。正像二千年之間ノ悪王悪比丘等ハ或ハ用ヒ外道ヲ一或ハ語ラヒ道士ヲ一或ハ信ズ邪神ヲ一。滅ニ失スルコト仏法ヲ一似レドモ大ナルニ其科尚浅キ歟。今当世ノ悪王悪比丘ノ滅ニ失スルハ仏法ヲ一、以テ小ヲ打チ大ヲ以テ権ヲ失フ実ヲ。削テ人心ヲ一不レ失ハ身ヲ、不シテ焼キ尽サ寺塔ヲ一自然ニ喪ボス之ヲ。其失超ニ過セル前代ニ也。我門弟見テ之ヲ信ニ用セヨ法華経ヲ一。瞋ラシテ目ヲ向ヘレ鏡ニ。天ノ瞋カルハ人ニ有レバ失也。（『法華取要抄』八一七～八一八頁）

（三）法華経の行者の怨敵となる

我無始よりこのかた悪王と生レて、法華経の行者の衣食田畠等を奪とりせしことかずしらず。当世日本国の諸人の法華経の山寺をたうすがごとし。又法華経の行者の頚を刎こと其数をしらず（『開目抄』六〇二頁）

このうち、（一）は世法における国王観、（二）は仏法における国王観、（三）は日蓮聖人自身の過去世謗法の罪について述べた箇所ではあるが、悪王の一面として法華経の怨敵となる場合を挙げたものである。

なお、印度・西域の亡国の悪王の先例を引いて、日蓮聖人が当時の日本国の王臣・万民の現状に照らし合わせた説示として、例えば『法蓮鈔』（九五六頁）では、「此国の一切の僧は皆提婆・瞿伽利が魂を移し、国主は阿闍世王・波瑠璃王の化身也。一切の臣民は雨行大臣・月称大臣・刹陀耆利等の悪人をあつめて日本国の民となせり」などと述べ、僧侶・国主・臣民のいずれもが悪逆・謗法の輩であることを指摘する。また、『光日房御書』（一一五九～一一六〇頁）、『瑞相御書』（八七五～八七六頁）、『撰時抄』（一〇一八頁）、『智妙房御返事』（一八二七頁）等では、阿闍世王が六師外道や提婆達多を頼みとしたのと同様、蒙古調伏のため謗法の祈祷を頼みとする日本国は天変・国難に見舞われるのは必至であり、懺悔滅罪・謗法禁断なくして国難回避の道はないとする。

また、こうした愚主の世には、賢者の出現と正法の流布が期待され、このことに言及する例として、『法華取要抄』（八一八頁）では、

如ク是ノ乱レテ国土ニ一後、出ニ現シ上行等ノ聖人一、本門ノ三ノ法門建ニ立シ之ヲ一、一四天四海一同ニ妙法蓮華経ノ広宣流布無レキ疑ヒ者歟。

とみえる。ほかにも『種種御振舞御書』（九六一頁）、『撰時抄』（一〇一六頁）などに同様の記述が確認される。

更に、謗法の国を治罰・呵責するのは、必ずしも当該国の賢王とは限らず、隣国の賢王がこれに代わることについても、『三三蔵祈雨事』（一〇七一頁）に

彼王臣等、他人がことばにつひて一人の正法のものを、或はのり、或はせめ、或はながし、或はころさば、梵王帝釈無量の諸天、天神地神等りんごくの賢王の身に入ッかわりて、その国をほろぼすへしと記し給へり。今の世は似て候者哉。

とみえ、『報恩抄』（一二二四頁）には、

此等の経文のごときんば、正法を行ずるものを国主あだみ、邪法を行ずる者のかたうどせば、大梵天王・帝釈・日月・四天等、隣国の賢王の身に入ッかわりて其国をせむべしとみゆ。

などと述べている。同様の記述は、『撰時抄』（一〇〇七～一〇〇八頁）、『下山御消息』（一三四二頁）などにも確認される。

なお、賢王による誡責愚王・呵責謗法は、折伏との関係で論じられることもある。『如来滅後五五百歳始観心本尊抄』において、「此四菩薩、現ズル二折伏一ヲ時ハ、成テ二賢王一ト誡二責ン愚王一ヲ、行ズル二摂受一ヲ時ハ、成テ僧ト弘二持ス正法一ヲ」（七一九頁）とみえるがごときである。ここでは、賢王が愚王を誡めるために顕現するのが折伏であると解釈できる(12)。また、『転重軽受法門』では、転重軽受について論じる中において、法華経のために国主・臣民から受ける迫害は、自身の過去謗法の懺悔滅罪にあたることを明かすと同時に、「第十四ノ提婆菩薩は外道にころされ、第二十五師子尊者は檀弥栗王に頚を刎られ、其外仏陀蜜多・竜樹菩薩なんども多ク の難にあへり。又難なくして、王法に御皈依いみじくて、法をひろめたる人も候。これは世に悪国善国有リ。法に摂受折伏あるゆへかとみへはんべる」（五〇七～五〇八頁）と、為政者が仏法を毀謗する世には行者に王難・迫害があること、為政者が仏法に帰依した世には行者も庇護されることを取り上げ、国においては前者は悪国、後者は善国、法においては前者は折伏、後者は摂受にあたると意義づけている。ただし、提婆菩薩・師子尊者らが自ら折伏を行じたとする記述は確認できない。それぞれの過去謗法の懺悔滅罪のために、難を受けるというかたちで折伏がなされる（現じられる）と読み取るべきなのか、このあたりは更に検討を要する点と思われる(13)。

八、むすびにかえて

以上、遺文中に登場する印度・西域の国王について、日蓮聖人の知識と認識を確認し、また日蓮聖人の歴史観・国王観の一端について愚見を述べてみた。遺文には、前六～五世紀頃の十六大国の時代から七世紀のヴァルダナ王朝期に至るまで六王朝に亘る一七名の国王が登場したが、いずれも単なる王統史の歴史事実の紹介にとどまることなく、ある一定の基準に則って例示・引例する傾向が確認された。

いま、本稿の考察の約言すると、以下の通りとなる。

（一）印度王統史上の国王の行状を引く場合の日蓮聖人の基本的な視点は、概ね仏法と王法の因果関係に置かれている。この態度は、中国・日本の史的叙述においても、ある程度一貫していると思われる。

（二）印度王統史上の国王のうち、頻婆娑羅王と阿闍世王、波斯匿王と波瑠璃王については、父子の関係に言及する際にも引き合いに出されることがある。

（三）賢王・明王とは、天地の道理あるいは法の邪正を弁えて政道を執行する国王で、政道に非あればこれを注進するような有能な賢者・諫臣を登用し、またその進言を汲み上げる度量を有した者、さらには人心を顧みず非道を行う悪王・暴君・愚王を誡責し治罰する者と規定する。

（四）印度王統史からは、仏教を擁護し統一国家を築いた王として、マウリア王朝の阿育王、クシャーナ王朝の迦弐色迦王などを、謗法禁断により愚王を廃し国家を再建した王として、クシャーナ王朝の雪山下王、グプタ王朝の幼日王、ヴァルダナ王朝の戒日王などを、それぞれ実例として挙げ、高く評価する。

（五）悪王・愚王とは、天地の道理も法の邪正も弁えず、邪師や佞臣・奸臣の言葉に誑かされ、正義・正法を軽んじ、邪義・邪法を尊び、あるいは正義を行う賢者や諫臣を弾圧・迫害する者と規定する。

（六）印度王統史からは、賢人の諫言を用いなかったために失位・亡国の末路を辿った国王として、釈尊在世中の優陀延王、クシャーナ王朝の屹利多王などを、仏法を破壊したため亡国・喪身の末路を辿った破仏・破法の国王として、釈尊在世中の波瑠璃王、シュンガ王朝の弗沙弥多羅王、グプタ王朝の檀弥羅王・大族王（弥羅掘王か）、ヴァルダナ王朝の設賞迦王などを、それぞれ実例として挙げ、今の日本国の現状を憂う。

（七）釈尊とその教団を弾圧した破仏・破法の国王でも、阿闍世王に関しては、後に懺悔・改心したことで救済されたことを説く。

（八）これらの先例をもって、日蓮聖人は、当時の日本国の為政者が模範とすべき態度を指南する。謗法に染まった国王であっても、信仰の寸心を改め実乗の一善に帰依することが肝心で、これにより天下泰平・国土安穏が実現すると主張する。

今後の課題としては、印度・西域に留まらず、中国・三韓・日本の国王・為政者についても、同様な方法論で日蓮聖人の知識と認識を把握し、三国に亘る日蓮聖人の国王観の全体像を比較・検討してみたい。また、それら諸王の事蹟を説示するにあたって日蓮聖人が依拠したと思われる文献の存在についても検討を加えていきたい。印度・西域においては、特に優填王と優陀延王および設賞迦王と金耳国王とを別人とみなしている理由、迦弐色迦王と金粟王に対する認識の同異、檀弥羅王と弥羅掘王とを同一視する説を用いない理由なども、これら拠り所となった文献の検討から詳らかになるのではないかと思われる。

註

（1）高森大乗稿「日蓮聖人の歴史叙述に関する編年的考察―日本史を中心に―」『大崎学報』一五四号（一九九八年）、荒誉子稿「日蓮聖人の歴史叙述に関する編年的考察―中国史を中心に―」『仏教学論集』二四号（二〇〇〇年）ほか参照。

（2）高森大乗稿「日蓮遺文の釈尊本生譚」『上田本昌博士喜寿記念論文集　日蓮聖人と法華仏教』（大東出版社、二〇〇七年）参照。

（3）「日蓮聖人遺文における説話の研究―「優填大王」を中心に」『日蓮教学研究所紀

要』一五号（一九八八年）。

（4）高森大乗稿「日蓮聖人における『日本書紀』の受容」『田賀龍彦博士古稀記念　仏教思想仏教史論集』（山喜房仏書林、二〇〇一年）参照。

（5）高森大乗稿「日蓮聖人の歴史叙述に関する編年的考察―日本史を中心に―」『大崎学報』一五四号（一九九八年）参照。

（6）「日蓮聖人の「阿闍世」解釈について」『宗教研究』五九巻四輯（一九八六年）、「日蓮の「阿闍世」解釈について」『日蓮教学研究所紀要』二〇号（一九九三年）、「阿闍世物語の受用をめぐる問題―親鸞と日蓮の対比―」『大崎学報』一六一号（二〇〇五年）、『日蓮教学における罪の研究』（平楽寺書店、一九九九年）ほか。

（7）廣田哲通著『中世仏教説話の研究』（勉誠社、一九八七年）、龍門義通稿「日蓮聖人遺文にみられる供養説話について―阿育王説話を中心に―」『立正大学大学院年報』六号（一九八九年）、同「日蓮聖人遺文における阿育王説話について」『日蓮教学研究所紀要』一七号（一九九〇年）など。

（8）『大般涅槃経義記』（『正蔵』三七巻七一七頁ｃ）には、弥羅掘王により師子尊者が殺害されたことが記されており、檀弥羅王と弥羅掘王とが同一視される理由のひとつと思われる。

（9）仲澤浩祐『グプタ期仏教の研究』（平楽寺書店、二〇〇八年）。

（10）高森大乗稿「日蓮遺文の釈尊本生譚」（前掲）ほか参照。

（11）『録内啓蒙』五巻五一丁参照。

（12）茂田井教亨氏は、『日蓮の行法観―その思想と生涯―』（佼成出版社、一九八〇年）において、「蒙古襲来の歴史的事実をみると、本化の四菩薩は隣国の賢王となって愚王を誡めるということであり、それはすなわち本化の四菩薩が折伏を現じた姿である。自己が本化の四菩薩になる立場からみると、四菩薩が僧侶となって正法を弘持するということであり、それは摂受によって法を弘めることをいう。この僧侶とは日蓮のことである」（取意）と述べる。高森大乗稿「日蓮遺文の釈尊本生譚」（前掲）ほか参照。

（13）釈尊本生譚と摂折論の関係について、今成元昭氏は、『法華経』常不軽菩薩の忍難弘経は、弘持正法の僧による摂受であり、『涅槃経』有徳王・仙豫国王の執持刀杖・謗法断罪は、護持正法・誡責愚王の賢王による折伏にあたるとし、折伏とは、出家者が自ら断行するものではなく、出家者の宗教的真価に信伏した為政者（賢王）や諸天善神が、それぞれの威力によって邪法の徒に懲罰（調伏・降伏）を与えるというかたちで存在するものであると主張。末法の時、謗法の国、逆縁の機に対しては折伏が必要であるが、それは善神や賢王によって現ぜられるべきものであって、行者が行ずべきことではなく、行者はあくまで忍難弘経の摂受門に住し、謗法呵責（禁断謗施）の国王とよりあって、立正安国を実現することが求められるとする。今成元昭稿「日蓮の用語をめぐる一問題―摂受・折伏について」『仏教思想仏教史論集』（山喜房仏書林、二〇〇一年）、「日蓮の摂受・折伏をめぐる一問題―『法華経』の折伏について―」『日蓮教学研究所紀要』三〇号（二〇〇三年）、「教団における偽書の生成と展開―日蓮の場合」『仏教文学』二九号（二〇〇五年）ほか参照。